

## 笠岡文化散歩（2）

### 小野竹喬と兄・竹桃



小野家の跡 学習塾「銀杏学習会」  
笠岡市中央町 34-1



建物の壁面に埋め込まれているプレート

小野竹喬の生家は笠岡市内・中央商店街かつての西本町に在りました。

現在は学習塾「銀杏学習会」と成っています。竹喬が生まれ育った時期の木造家屋は現在の建物に変わり、その壁面に「小野竹喬生誕の地」と記したプレートが埋め込まれています。

竹喬に商家を継がそうと思念する父を説得し、竹喬に画家と成る事を勧めたのは兄・益太郎（竹桃）でした。その生涯はドラマチックで恰も映画を観るかのようです。画家と成ることを勧め京都に呼び寄せた弟・英吉（竹喬）と共に竹内栖鳳の下で絵の勉強をしていた彼は後に竹喬を京都に残し一人上京し役者を志します。日本の新劇運動の創生期に坪内逍遙が自宅内に設立した文芸協会演劇研究所に、第一期生として入所しています。文芸協会解散後に出来た芸術座では、「人形の家」で人気役者・松井須磨子演じるノラの夫ヘルメルで舞台に立っています。その後、沢田正二郎の旗揚げした「新国劇」にも参加しました。

また、村瀬青々に俳句を学び俳句誌「をこぜ」を発刊しています。竹喬も俳句を寄せ「魚乙」の雅号で発表しています。

竹喬晩年の「奥の細道句抄絵」へと繋がる日本画と俳句の繋がりはこの頃に萌芽をみます。



小野竹桃



松井須磨子

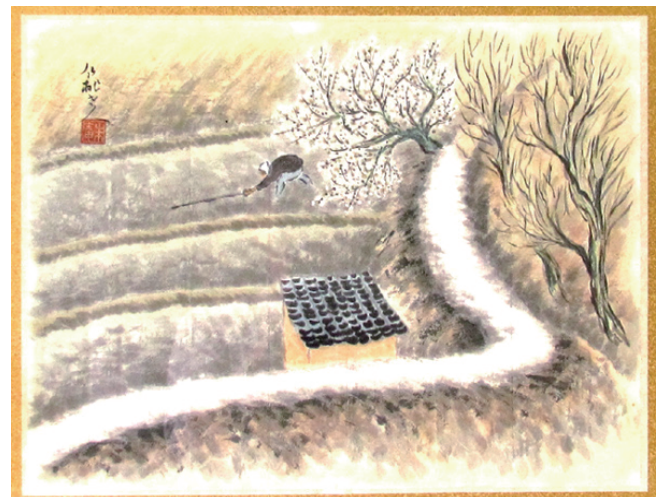
竹桃は中央の展覧会に積極的に日本画を出品しています。大正8年第一回帝展に「長瀬二面」を、第二回大正9年「秩父山村」、第三回大正10年「田園二図」（笠岡風景）を発表しています。

竹桃の描いた日本画は竹喬の竹橋時代の作品と合い通じるものがあります。どちらかが他の一方を模倣したものか、同じ竹内栖鳳画塾の指導を仰いだ事によるか、また兄弟なので、その根底に流れる遺伝子に共通した感性が有る為なのかも知れません。

南昌院所蔵の絵では背中の子供を配して、のどかな田園風景を画いています。このような風景は初期の竹喬にも頻りに登場します。

小野竹喬の絵画の底辺に潜むロマンチズムとノスタルジックな絵画を汲み取るのに、竹桃の残した作品は参考になります。

竹桃は78歳で京都にてその生涯を終えました。現在、小野家の菩提寺である南昌院の墓所に瞑しています。（L. 豊池 勇）



小野竹桃 田園風景（南昌院蔵）